

ことは人事より始まる

大森 康宏
(おおもり やすひろ)

本館民族文化研究部

フランス、パリ第5大学修士課程修了、パリ第10大学にて民族学博士号取得。1976年に民博に着任。総合研究大学院大学文化科学研究科併任教授。専門は映像人類学(民族誌映画)。ヨーロッパの移動民マヌーシュの生活やその信仰、また聖地や巡礼に焦点を当てた映像記録を含め作品数は長編50本余り。著書に『映像人類学の冒険』(せりか書房)、『進化する映像』CD-ROM付(千里文化財団)など。撮影・制作監督を務めた「津軽のカミサマ」が1995年フランス、パリ第14回民族誌映画大会ナヌーク賞(グランプリ)受賞。3月15日から特別展「聖地・巡礼—自分探しの旅へ—」公開。

ジャン・ルーシュ(1917~2004年)との最後の1枚
パリのカフェにて(2003年、秋)



さよなら民博

山本 紀夫
(やまもと のりお)

本館民族文化研究部

京都大学大学院農学研究科博士課程修了。1976年に民博に着任。助手、助教授を経て教授。総合研究大学院大学文化科学研究科併任教授。アンデスやヒマラヤ、チベットなどの山岳地域で主として先住民による環境利用の方法の調査、研究に従事。著書に『インカの未裔たち』(日本放送出版協会)、『ジャガイモとインカ帝国』(東京大学出版会)、『ラテンアメリカ楽器紀行』(山川出版社)、『雲の上で暮らす—アンデス・ヒマラヤ高地民族の世界』(ナカニシヤ出版)など。

民博研究部の野球チーム(1976年)。
筆者(左から2人目)を最後として、みんな民博を去った



民博に在籍することになったきっかけ、そして今日のわたしがあるのは、フランスの民族学者で映画制作者のジャン・ルーシュとの出会いがあったからである。

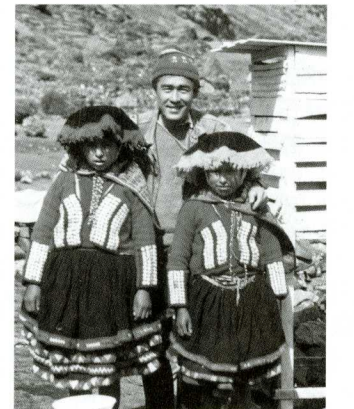
一九七〇年にフランスのトゥール大学大学院に入学し、一年ほどして民族学研究の必要性から動く映像による調査ノートとして映像作品に関心をもつようになった。毎日のように移動生活を続けるマヌーシュたちの姿をノートに書くだけでは、出来事を思い起こすことは可能であっても、詳細な事実はボンヤリとしたものであった。それをひとつひとつ映像のコマに記録し、再生できるもの、それは映画しかなかった。

当時トゥール大学に芸術社会学の教授として活躍していたジャン・ドヴィニョーの生徒となったわたしは早速映画と社会科学についてたずねてみると、即座にジャン・ルーシュなる研究者の存在を教えてください。しかし彼にコンタクトし、門下生となる方法は教えてくれなかった。

一九七二年春になって、パリへ出るたびにジャン・ルーシュに面会しようとする人間博物館の事務所、国際民族誌映画委員会を訪ねた。しかし留守がちなうえに編集作業に入るとまったく人と会わないと聞かされた。数回廊下で会えたのだがいつも「次回に」と言われ、話ができなかった。

翌年の一九七三年、第九回国際人類学・民族学シカゴ会議の「Urgent Anthropology」のもとで、民族誌映画が重要視され、日本の「映像記録センター」の活動が注目されると、

自作の百葉箱とともに。ペルー、クスコ県マルカバタ村にて(1984年)



「大阪の万博跡地に博物館ができるらしい」という噂を聞いたのは、たしか一九七四年のことであった。アマゾン川源流域を歩き回っていたとき、そのニュースがどこから入ってきたのだった。しかし、そのときはまさか自分がその博物館に勤務することになるうとは思ってもみなかった。

その二年後、経緯は省略するが、わたしは民博の館員になった。当時の民族学はまさに上げ潮といった感じで、民博も熱気にあふれていた。梅棹忠夫館長も館員にさかんに激を飛ばしていた。いわく、早く学位をとれ、一年間に一〇〇枚の原稿(四〇〇字詰で!)を書け、などなど。しかし、館員はみんな若く、元気にあふれていたせいか、激しい激も苦にならず、それを励みに開館に向けて全力を投入していた。

わたしも無茶苦茶な忙しさのなかで、自分の力を試しているような気分を味わっていた。それというのも、わたしはもともと京大の大学院で植物学を専攻する大学院生であったが、博士論文に向けての実験の途中で民博に就職したため、二重生活を余儀なくされたからである。すなわち、日中は民博で開館に向けての展示作業や図録作りをしながら、夕方の五時以降は京大に行って夜遅くまで植物の観察を続けていたのである。

そんな生活は結局、民博が開館してから一年後の九月まで続いた。そして、学位論文を提出したあと、すぐにわたしはペルー・アンデスに向かった。学生時代からの夢であった「インカの未裔(まきえい)たちと暮らしをともにし、彼らの社会や文化を明らかにするためである。じつは、この夢を実現したかったからこそわたしは植物学から民族学に転向したのである。

当時、民博では他分野から民族学に転向したスタッフはめずらしくなかった。そもそも館長自身も動物学から民族学に転じた研究者であった。これは、当時の民族学が他分野の研究者をも引き込むだけの大きな魅力をそなえていたことを物語るであろう。それから三〇年が経ち、民族学も民博も大きく変わった。とりわけ、民博は同じ研究組織と思えないほどに変わった。そんな民博の今後をこれからは遠くから見守ることにしよう。

では、さよなら民博。

ルーシュからわたしに接触してきた。当時ルーシュはアフリカの人びととしか接しないとうわさされていた。この後にルーシュとしては初めてわたしという東洋人の生徒を指導する教官となった。

ルーシュからマルセル・モースの生徒で多彩な才能を発揮した岡本太郎を紹介され、彼から古きものなかにこそ新しい芸術表現が見えてくることを教えられた。

さらに、シネマテークフランセーズのアリ・ラングロワの生徒となつて、シネマの歴史と人間の関係から人間の感性の深さを教えられた。当時、博物館のモノの展示と映像展示の組み合わせをどうするかは二〇世紀後半の問題としてクローズアップされてきた。

こうしたなかで、岡本太郎の「太陽の塔」のある万博公園内に、民博が開館することとなり、一九七五年、初代館長であった梅棹忠夫先生が民族学研究を求めているか映像制作をしている研究者を求めてわたしにコンタクトしてこられた。結果的に開館の前年、一九七六年秋から赴任することになった。

ジャン・ルーシュは生涯にわたって自分の直弟子とよべる人間を個人的に育てなかった。自分の撮影地や編集室にも他人を入れながらなかった。しかしわたしはアフリカの撮影地を除いて、パリ市内の撮影や編集にはしばしば立ち会ったことを許可された。東洋人として初めてルーシュの助手つとめをすることができたのは、一生の糧となった。